奉納
万寿
千年
祈百
世
奉納
奉納

八足空神社

奉納
寿万年祥百世

万寿

御神燈
御神燈

神燈
神燈

八咫壺神社
由緒沿革
古来、新開地で開拓が進むと苦難や哀楽を共にする仲間が心の拠り所として集う社が建立されたのはごく自然なことであった。
矢木村、高道村、坪内村にもいくつかの社が鎮座されていた。矢木神明社はおよそ三百年前にこの場所に創建され、明治七年になって社殿老朽化のため再建願書により改築されている。同じ頃、矢木神明社に矢木源訪社、庄下館太刀壺社を合祀し、社名は矢木神社と改められている。更に、大正七年に高道神明社、坪内神明社、庄下新神明社も合祀して、八咫壺神社と改称され、同時に神饌幣帛料供進指定神社に認定されている。祭神は豊受大神、建御名方命、建速須佐之男命、天照皇大神と多彩である。
合祀の際、拝殿はそのまま存置し、本殿、中門、社務所は改築された。社紋の輪宝（三種の神器の象徴）は矢木神明社の社紋を採用している。坪内神明社の拝殿は倉庫として境内に移築されていた。千歳十一年には社務所の改築、社殿屋根瓦の葺き替え、千歳十七年には前年の台風で倒壊した鳥居の復興や玉垣の定工を果たした。いずれも氏子の浄財によるものである。しかし、度重なる台風で境内の大杉の森を失ったのは悔まれる。その後、若木が氏子の手で植えられた。
八咫壺神社の社号は矢木村の「や」、高道村の「た」、坪内村の「つぼ」を合せ、しかも「八咫」は八咫烏、八咫鏡にも通じる言葉であり、在郷の平安と繁栄を願った古人の思いが感じられる。
往古より農業を種としていた当地域も近年は農家、非農家の混住化が進み、氏子は大幅に増えるも、共に崇敬の念は篤く今日に引継がれている。秋祭は参拝の老若男女と獅子舞の奉納で賑わう。
祭礼
元旦祭　一月　一日
春祭　鎮火祭　三月二十二日
秋季例大祭　十月二十二日
新嘗祭　大祓式　十二月　二日
平成十九年七月
記　宮　司　林　直大
氏子総代　根尾　紘一

八咫壺神社
由緒沿革
古来、新開地で開拓が進むと苦難や哀歓を共にする仲間が心の拠り所として集う社が建立されたのはごく自然なことであった。
矢木村、高道村、坪内村にもいくつかの社が鎮座されていた。矢木神明社はおよそ三百年前にこの場所に創建され、明治七年になって社殿老朽化のため再建願書により改築されている。同じ頃、矢木神明社に矢木諏訪社、庄下綜太刀魚社を合祀し、社名は矢木神社と改められている。更に、大正七年に高道神明社、坪内神明社、庄下新神明社も合祀して、八咫壺神社と改称され、同時に神饌幣帛料供進指定神社に認定されている。祭神は豊受大神、建御名方命、建速須佐之男命、天照皇大神と多彩である。
合祀の際、拝殿はそのまま存置し、本殿、中門、社務所は改築された。社紋の鏑賓（三種の神器の象徴）は矢木神明社の社紋を採用している。坪内神明社の拝殿は倉庫として境内に移築されていた。平成十一年には社務所の改築、社殿屋根瓦の葺き替え、平成十七年には前年の台風で倒壊した鳥居の復興や玉垣の定工を果たした。いずれも氏子の浄財によるものである。しかし、度重なる台風で境内の大杉の森を失ったのは悔まれる。その後、若木が氏子の手で植えられた。
八咫壺神社の社号は矢木村の「や」、高道村の「た」、坪内村の「つぼ」を合せ、しかも「八咫」は八咫烏、八咫鏡にも通じる言葉であり、在郷の平安と繁栄を願った古人の思いが感じられる。
往古より農業を糧としていた当地域も近年は農家、非農家の混住化が進み、氏子は大幅に増えるも、共に崇敬の念は篤く今日に引継がれている。秋祭は奉拝の老若男女と獅子舞の奉納で賑わう。
祭礼
元旦祭　一月　一日
春祭　鎮火祭　三月二十二日
秋季例大祭　十月二十二日
新嘗祭　大祓式　十二月　二日
平成十九年七月
記　宮司　林　直大
氏子総代　根尾　紘一

八坂神

八坂神社

御神燈
御神燈

寄進人
氏子一同

奇進人 氏子一同

御神燈